「はれ予報 1-2月 特大号」（しんきんカード）

2018年1月発行

田端文士村記念館
東京都北区田端6-1-2
Tel:03-5685-5171

上／企画展「芥川龍之介の結婚と生活」を開催中（2月4日まで）。旦那のつは、芥川が後に妻となる文に贈ったラブレター（初公開）。（白分は）小島ノヤウニ幸福ダス」という締めの文句が印象的。下／田端文士村記念館は入館無料

台地の際に開けた街に作家や芸術家が集い暮らした

電車で湯ると東京は平坦と感じだと思いがちだが、実は知らぬ間にかり下りを繰り返している。JR山手線各駅の標高を比べると、最も高い駅（新宿）と低い駅（品川）の高低差は、なんと30m超。中でも東京の起伏を実感しやすいのが田端駅の周辺だ。なにしろ隣の駒込駅を出て間もなく、電車は武蔵野台地を駆け下りながら右折して台地の際に寄り添う。田端までの一駅で10m以上も標高が下がるのだから、けっこうな坂道だ。田端駅のホームから西方向の視界が右垣に遮られているのは、そこが崖下だからにほかならない。

北口を出て田端駅前通りをしばらく歩くと、田端の地形のダイナミズムをまた思い知る。眼前に現れるのは、武蔵野台地を切り開いたまっすぐの坂道、田端切通し。両側の石垣をじっくり味わおう。高いところでは10mほどもあるだろうか、一瞬目眩を覚えてそりそり立つ偉容に圧倒される。「死者も生屍星の存在もパワフルな引力となった。彼らの友人知人がまた知己を呼び寄せる形で文人の数が増し、ついには「文士村」と呼ばれるほどのコミュニティに育ったわけだ。

かつてこの地を闊歩した彼らの足跡に触れるなら、田端文士村記念館へ。原稿や書簡などのほか、暮らしぶりがうかがえる資料も豊富だ。住事の建物は戦災をみな焼けてしまったが、芥川が「雨の日は「大分雰囲気だ」と喝いた動坂、ボプラ倶楽部があったボプラ坂など、散策の途中、住事をしのぶよすがはそこかしこにある。

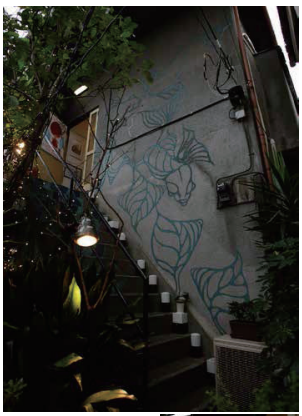
出たほどの雛壬事の末、完成したのは1935年。田端と本郷を結ぶ物資の輸路として造られたようです。それ以前は湯岡りの農園が「本あるだけの自然豊かな地域でした。買い物帰りの主婦がその道で、買った魚をイタチに奪われたという逸話が残っています（田端文士村記念館の研究員、石川士明さん）。

武蔵野台地の北東端に位置する田端の地には明治以降、多くの芸術家や文人が住んでいた。最初の契機は1889年、上野に東京美術学校（現在の東京藝術大学）ができたこと。当時農村だった田端は家賃が安く、それいて学校までは徒歩圏内だったため横が寂しい芸術家の卵が集まった。

画家たちの社交場、ボプラ倶楽部がにぎわうなど、当初はもっぱら芸術家が幅をきかせていましたが、大正期以降、小説家や詩人が増えていきます。一番の要因は、1914年、当時まだ生だった芥川龍之介が一家で移ってきたことでした（芥川さん）。

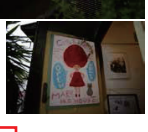
その翌年「羅生門」を発表し、見る間に文壇に地歩を築いた彼はもちろん、間もなく転入してきた室

マルイケハウスの「マダム」芳賀さん（左）とまるまるくちんの店主、中嶋千晶（右）さん。「大阪から来たよそ者の私ですが、すんなり溶け込めました。懐の深いマダムと田端の街のおかげです」（中嶋さん）



マルイケハウス
東京都北区田端4-3-3
http://maruike-house.com/

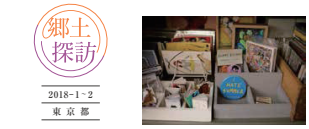
逃落ち気に浜みが重るマルイケハウスの外観。テナントはどれもこく狭いスペースに店主のこだわりを詰め込んだような店



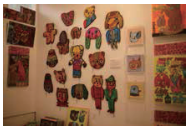
はがいちようの駒込スタジオ
Tel: 080-5497-3497
http://www.ichiyoh-haga.com/jp/
※入場料1000円。来館の際は事前に連絡を

マルイケハウスから徒歩10分ほどの場所に位置する、はがいちようさんのギャラリー。精巧なミニチュアハウスが十数点展示されている

左／東京・銀座にある文具の老舗・伊東屋の創業当時の佇まい
右／昭和の漫画家の部屋を再現



上／雑貨類も販売。多くはロンドンで集めてきたもの。左／ポップでキュートなロブさんの作品群。購入可



SNSにタグ付け&シェアしてくれる人は撮影OK!

ロブさん（左）とYOKOさん（右）

WISH LESS gallery
東京都北区田端5-12-10
Tel:03-5809-0696
http://wish-less.com/

WISH LESS galleryの展示スペースはもっぱら新進アーティストをフィーチャー。ロブさんのコネクションも展示作品の幅を広げる。写真は彼の友人、ヴィニー・ナイロンさんの作品

ロンドンのストリートアートシーンで活躍するA.CE（エイス）の個展の様子

アート通注目のギャラリーも日本一優しい映画館も

「体育会系」か「文化系」かといえば、田端の街は断然後者。かつて芸術家や文人が集った地柄ゆえか、文化が薫るユニークでディープなスポットが目立つ。

筆頭は「WISH LESS gallery」。デザイナーのYOKO NAGAさんと、夫でイラストレーターのロブ・キドニーさんが運営するアートリエ兼ギャラリーだ。5年前に開いて以来、無名ながらも可能性を秘めた国内外のアーティストに光を当ててきた。エッジの効いたそのセレクトに「目肥くアートファンは、世界中にいる。「選ぶ基準は私たちが好きかどうか。最近はインスタグラムを見て訪ねてくれる海外の方もふえんです。特に人込みの多い新宿や渋谷など見てきた人は、「田端ののんびりした雰囲気にホッとした」と言ってくれます（YOKOさん）。

「マルイケハウス」もぜひチェックしたい。レトロモダンなアートに着物ショップや鍼灸院など、どれも一癖ありそうなテナントたちが和気あいあいと店を開く。まるで映画かマンガの世界から抜け出たような、不思議な空気感が楽しい。「建物ができた1964年当時は、新婚さんも憧れるお洒落なアパートだったんですよ」と微笑みながら、入居者たちに「マダム」と慕われるオーナーの芳賀敏子さん。「7年前、ボヤが起きて改築するとき、娘のアイデアでなんでもありのテナントアパートに衣替えしたんです。入居希望の方はたくさんいらっしゃるんですけど、私との面談をクリアしていただか

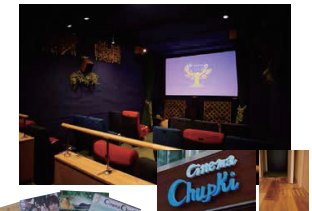
ないと……。ちなみに男性はイケメン限定（笑）」

奇しくも芳賀さんの夫は、細密な立体作品で世界的に知られる造形作家、はがいちようさん。自宅のギャラリーを一般に公開しているので、こちらも必見だ。

そして、愛らしい映画館もある。「シネマ・チュプキ・タバタ」は、昨年オープンした日本初のユニバーサルシアター。目が見えなくても耳が聞こえなくても赤ちゃんと一緒でも、気軽に映画を楽しめる、代表の平塚千穂子さんは、もう16年も目の不自由な人に映画を楽しんでもらうための活動を続けている。

「自前の映画館という夢の実現がすべての人がアクセスできる映画館にしようと考えたんです」

上映するすべての映画が字幕と音声ガイド付き。車いすでゆったり見られるスペースも親子鑑賞室もある。とびきり優しい映画館の存在は、街の人たちの意識も変えた。最近は白い杖をついて道に迷っている人がいると、近所の人が連れてきてくれたりするという。



シネマ・チュプキ・タバタ
東京都北区東田端2-8-4
Tel:03-6240-8480
http://chupki.jpn.org/

上／シネマ・チュプキ・タバタは通常なら音声ガイドが付かない単館系の佳作をセレクトして上映。左／上映作品のパンフレット。右／森をイメージした館内は完全バリアフリー。段差のない床には点字ブロックが

うちは音のよさも自慢。どなたでもウェルカムです!